

映画『コット、はじまりの夏』におけるふれること —環境の失敗と心が動き出すこと—

恒吉 徹三*

On Touching Through the Cinema “The Quiet Girl”: Environmental Failure and Aliveness

TSUNEYOSHI Tetsuzo*

(Received September 26, 2025)

本稿では、映画『コット、はじまりの夏』を通して、環境の失敗 (Winnicott, 1988) により放っておかれて「ふれられない」存在として扱われ、物静かな子どもとして生きてきた主人公コットが能動的な主体となる過程について、ふれることと心が生き生きと動き出すという点から検討した。コットを親戚夫婦に預けることは放っておくことの反復であり環境の失敗も反復された。親戚夫婦は一貫してやさしくていねいにふれる関わりを続け、夫妻のふれられない秘密が明るみに出て3度目の環境の失敗が生じた。その時コットは、それまで着せられていたショールを脱ぎ捨てあらがったかのように見えた。その後、親戚夫婦との間に強い絆が構築され、放り出されてふれられない存在となっていたコットは、「自力で動いて戻ってくる能力を楽しむ」(Ruf, 2024) ようになり、生き生きとした心が動く主体へと変化した。加えて、コットを演じる俳優への「透明感」という論評を、筆者は、コットにも適用し、これを転移の観点から論じた。

はじめに

本稿では、映画『コット、はじまりの夏』(以下、本作と略す) について、「ふれること」という観点から、主人公である9歳のコットが、周囲の人との関係つまり相互作用の中でどのように変化していくかについて検討する。原作(原題)は“The Quiet Girl”と題されているように、主人公のコットは物静かで表情もあまり変化がないというよりどちらかといえば暗く、心の動きが捉えにくい人物である。このコットが、母親が出産するため、夏の間だけ預けられることになった親戚夫妻からのやさしくていねいな「ふれること」によって、心が生き生きと動き出して自らが能動的な主体となる過程について検討する。その際、どのような要因が関わっているのかを、コットの家族と預けられた母親の親戚である親戚夫婦の関わりとを比較しながら検討することが本稿の目的である。加えて、コットへの観客の転移についても分析する。

本作についてShelton (2023) は、コットがアルコール依存症の父親と、妊娠して手一杯の母親のもとで育った“lost child”であり、この少女が遠くの親類の家に

預けられたことで、「初めて思いやりと愛情を経験する」物語として捉えている。ただ、この点を詳細に論じているわけではなく、来談者や臨床家にとって、臨床やその教育の上で有意義な素材の1つとなりうる映画として検討している。特に、機能不全の家族の中での“lost child”の役割を担っている子どもの生き残る目的を探究する上で意義ある作品だと指摘している。また、白井(2024)は、「地方の平凡な少女の日常家庭生活の中にひそむ「差別」とでもいうべきものを静かに見つめた映画」であると評している。父親は「ギャンブルに熱中」し、母親は妊娠していて、コットの「世話をあまりみたくれない家」であり、淋しさや悲しみに焦点を当てているが、差別の解消については描いていないことも指摘している。この白井の指摘する「差別」が具体的に何をしているのかは当該資料からは明確に読み取ることができないが、筆者は、差別というよりも、養育者だけでなくきょうだいからも放っておかれて、1人だけ浮いた感じで家族の中に見えるように見える。無視されて「ふれられない」存在として生きている子どもだといえる。このような状態から少なくともコットの発達や変化を描いてい

* 山口大学教育学部、〒753-8513 山口市吉田1677-1、whiteowl@yamaguchi-u.ac.jp

ると捉えられることから、臨床心理学的に検討する意義のある作品だと考えられる。

また、Ruf (2023) は、「カーイトは、姉妹や同級生、そして実際には両親からも好かれていません。両親は、母親がもう一人の望まれない子どもを産むまでの間、彼女を遠い親戚の家に送り出そうとしているのです。」と誰からも好かれず、何より「望まれない子ども」としてコット（コットはアイルランド語のカーイト [Cáit] の英語表現）をとらえている。コットを含めて5人の子どもがいて、母親はさらに妊娠しているという状況を理解するには、映画の舞台となっている1981年頃のアイルランドの状況を踏まえる必要がある。

そこで、以下に北野 (2022) から少し詳しく引用する。1981年当時のアイルランドは、「依然としてカトリックを中心とする社会的価値に大きな変化はなく、性に関わることを大っぴらに語ることへの禁忌が根強く存在していた。避妊具は既婚者が自分の家庭内の目的で使用する場合にも禁じられていた。」ことを指摘している。さらに、経済運営が困難であったことから1973年から1987年のあいだは政権の入れ替わりが激しい時期で、1973年および1979年の2度にわたる石油危機による世界経済の減速の影響による財政悪化についても指摘している。結果的に失業と移民が増大し、財政赤字の対GNP比率は、1973年8%であったのが、1981年には再び16%に達し、1981年、1982年の2年続きで予算編成が困難となり下院の解散、総選挙に至る状況であったことについても指摘している。以上のような北野 (2022) の指摘を踏まえると、宗教的には戒律によって望まない妊娠が起きやすい状況であり、「望まれない子ども」としてコットのことをとらえるRuf (2024) の発想は、もっともな根拠があるといえる。

また、経済的に困難な状況に陥りやすい時代的な背景が存在していたことを念頭におくと、コットもコットの家の荒んだ様子も、家族内の問題というだけではなく、当時の社会経済的な環境の影響を少なくとも受けている一面はあると考えられる。ただ、コットが預けられる母親の親戚夫婦の家庭状況は、コットの家族状況よりも落ち着きも家の中の調度品などを見ても相対的なものであるが豊かさを感じられることから、社会経済政治的な状況の影響は、当然であるが家庭によって程度は異なると考えられる。それでも、このような時代背景を念頭において本作について解釈することは、現実はそのも複雑であることから映画の理解も単純化しすぎないために、また、映画の内容を美化したり極端に悪くとらえたりしない意味でも必要なことだと考えられる。

ところで、本作の日本での公式サイト（配給・宣伝：フラッグ）にも、パンフレットのIntroductionにも、

コットを演じているキャサリン・クリンチについて、「観る人の心をつかんで離さない存在感と、圧倒的透明感を持つ」ことや、「主人公のコットが抱えてきた諦観と、生きる喜びにあふれていくさま」を「繊細」に演じていると表現されている。ここで「圧倒的」と強調された上で用いられている「透明感」という言葉は、俳優についての論評だが、筆者はコットにも適用できると仮定して検討する。その際には、「コットが抱えてきた諦観」についても記述しているように、心的世界のありようを両面的に表現している点は臨床心理学的な点からももっともな表現である。

また、渡辺 (2024) は、本作をアタッチメントの再形成として捉えており、「人はいつからでも愛着を形成していけること、またコットが夫婦のグリーフを癒やしてくれたこと、本作は、コットと親戚夫婦との間にケアが循環したひと夏の物語として」、この映画のテーマを要約的にエッセーの中で述べている。本作は、アタッチメントの観点からも論じることは可能であり、単純化するなら、初期には回避的なスタイルであったコットが、親戚夫婦との関係を通して安定型のスタイルを再構築した過程が描かれている、ととらえることもできる。どのような概念でコットと周囲の人の関係をとらえるかでもあるが、本稿では、コットに生じた変化とその変化の過程における親戚夫婦との関係について、ふれることとふれないことという日常語と、特に環境の失敗という観点（概念）から検討することが目的である。

ところで、子どもを主人公とした物語について検討している笹田 (2015) は、“When Marnie Was There”を題材にして、「主人公が過去と遭遇する特別な場所、子どもの主人公にとっての愛する対象、孤立と成長について」検討し、主人公のAnnaが夏の一時期に滞在した土地にある館で、Marnieという「心を開く存在」に出会うことで「無表情」で「孤独のAnna」が「感情を動かす」という変化が起きていることを指摘している。特徴的なのは、「特別な場所」、「夏の一時的に滞在した時にある館」という場や空間の発達における重要性も踏まえた上で、同年代の友だちと出会うことによる変化が検討されていることである。本稿では、同年代ではなく大人との関わりの中での変化について検討する点では異なっている。一方で、コットも家族の中にもひとりぼっちであると言える点では、周囲の環境や関わりによってこのひとりぼっちなところから変化して（育って）いくのかを検討する点では共通している。

以上述べてきた本稿の目的を整理すると、家族の中では放っておかれているように扱われて「静かにしている」コットが、親戚夫妻の家に預けられることにより生き生きとしていく変化の過程がどのようにもたらされて

いくのかについて、「ふれること」と「ふれないこと」という観点から、つまり環境の失敗の反復とそこからの変化として検討することである。加えて、キャサリン・クリンチが演じているコットについて「透明感」という言葉で表現されていることを、観客のコットへの転移として検討する。

1. 映画『コット、はじまりの夏』についての基本情報

1-1 映画の基本情報

出演者名（役名：ほかの登場人物との関係）：キャサリン・クリンチ（コット）、キャリー・クロウリー（アイリン・キンセラ：コットの母の親類）、アンドリュー・ベネット（ショーン・キンセラ：アイリンの夫）、マイケル・パトリック（ダン：コットの父親）、原題（英題）：The Quiet Girl。

監督・脚本：コルム・バレード、原作：“Foster”（クレア・キーガン著）、撮影：ケイト・マッカー、美術：エマ・ローニー、衣装：ルイズ・スタントン、編集：ジョン・マーフィ、音楽：スティーブン・レニックス、配給：フラッグ、上映時間：95分、日本公開（製作年、国）：2024年1月26日（2022年、アイルランド）。

1-2 あらすじ（「ネタバレ」を含みます）

原題が示しているように、主人公のコットは、とても無口な少女である。彼女の家族は、アルコールに浸っている父親のダン、幼児1人をはじめとする5人きょうだいで（コットは4番目だと推測される）、子どもの世話に追われている母親のキャリーで構成されている。コットに対する両親の関わりが薄いものの、ちょっとしたことで叱ったりもしている。そのような中で学校が夏休みになって、母親が出産することもあって、コットだけが子どものいない親戚夫婦にダンの車に乗せられて預けられることになる。

親戚夫婦の家にコットの乗った車が着くと、叔母のアイリンが車に近づいてドアを開け、しゃがみ込んでコットに話しかける。車から降りてきたコットの様子を頭から足もとまで見て、長い髪の毛を後にかき分けてあげる。そして、家に入ると風呂の準備をして湯船に浸かるコットの手足を、ゆっくりとていねいに、スポンジで洗う。

この親戚夫婦は牧場を経営しており、叔父のショーンが牛舎の清掃や搾乳をしているのをコットも手伝うことになる。牛舎の床をブラシで清掃をしている叔父を見たコットは、自分からブラシを探しに牛舎から出ていく。ふと、コットがいなくなること気づいた叔父は、血相を変えて探し回る（この叔父の変貌ぶりは驚くほどで、過去に何らかこの夫婦とその子どもの間に事故でもあったのでは？と想像させる場面となっている）。そこに、別の牛舎でブラシを手にとろうとしているコットを見つける。

叔父は、訳も聞かずにコットを頭ごなしに怒鳴りつける。この出来事により、少しずつ慣れてきていた叔父に対してコットは口も聞かなくなる。例えば、叔母の手伝いとして食卓でジャガイモの皮をむいている時に、すぐ後ろで叔父が飲み物を飲んで作業に出かけてもお互いが知らない顔をしている。その状態が続いている中で、叔父は外出するときに、皮剥きをしているコットの後を通り過ぎる時に、コットの座っているテーブルの上にビスケットを、何も言わずにそっと置いて作業に出かけていく。

この夫妻の家には、村の人たちがやってきてカードゲームをしたり、村の人の葬儀にコットも連れて出かけたりのする場にもコットがいる。またある時には、叔父は、距離がちょっとある敷地の入り口にある郵便受けまで、走って手紙を取って戻ってくるように言う。そして、タイムも測る。次第にコットは、このかけっこで足が速くなっていく。

家に帰る日も近づいたある日、叔父と叔母が不在で家に一人残ったコットは、バケツを提げて井戸まで一人で出かける。ところが、井戸にバケツを差し入れると、入ってくる水の勢いで井戸の中に吸い込まれるようにバケツが沈み込む（この後のシーンからコットが井戸に落ちたことがわかるが、落ちるシーンは描かれていない）。ずぶぬれになって家へと一人歩いて帰っているところに、叔母が、（自分の不安から叱ることもなく）駆け寄って自分が着ていた上着をすぐにコットにかけ、髪の毛を撫で顔にキスをして自宅に連れ帰る。

数日後、コットは親戚夫婦の車で家に帰ることになる。家に着くとコットがくしゃみをするので、風邪を引いたのでは？と過剰に父親が心配する（というより親戚夫婦の前では言えないことがあるのでは？と言ったような嫌味な言い方をするので）妻がたしなめる。そして、親戚夫婦は帰宅するため車に乗り込み、家の門へと続く道を車が進んでいく。コットは、車が見えなくなると急に走り出して、家の門を出たところで門を閉めようとする叔父に抱き上げられる。そこに、近づいてくる父親の姿が目に入って、「ダディ」とコットはつぶやく。そしてさらに叔父をぎゅっと抱きしめて顔をうずめて、「ダディ」とコットはまたつぶやく。

2. ふれることとふれないこと

ここでは、ふれることとふれないことの観点からコットと周囲の人との関係について検討する。この「ふれる」という観点は、物語の前半のコットと家族との関係と、物語後半の母親の出産により預けられる親戚夫婦との関係を対比的にとらえることができ、コットにとって発達促進的なふれることについて検討することが可能になると考えられるからである。その際、漢字の「触れ

る」ではなく「ふれる」と平仮名で表記するのは、接触することなど直接に触れている状態を喚起しやすことから、ふれることとふれないことのグラデーショナルな点を議論するためにひらがなを用いることとする。たとえば広辞苑（第七版、p.2607）では、まず「①手や指先を物に少しだけつける。ちょっとさわる。軽くあたる。」こととして説明されており、ちょっとした、というニュアンスが強調されている。さらに、「②男女が親交を結ぶ。」「③関する。物事に出あう。時にのぞむ。」「④目・耳などに知覚する。」「⑤行き当たって打撃を受ける。」「⑥ひっかかる。犯す。」「⑦言いおよぶ。言及する。」などが続き、物理的な接触以外についても含まれており、その強弱も幅のある内容である。本稿では、主に①の「少しだけつける」「ちょっとさわる」という意味で用いることにする。

ふれることの重要性を指摘した研究の一つにHarlowら（1979）の代理母実験がある。アカゲザルの子どもを養育者（母親ザル）から引き離してケージの中で飼育し、針金だけの母親ザル模型とその針金の周囲に布を巻いた母親ザル模型とをケージの中に設置して、どちらにより長い時間抱きついているかを測定している。また、布製の物がケージの中にあると、子ザルが抱きつくなどすることで、子ザルの行動は落ち着くことも観察され、さらに系統的な実験が行われるなど、布が示すような養育者との接触感、肌感覚、つまりふれあうことの発達における重要性を指摘している。

2-1 ふれないこと

ふれないことの観点からコットと家族との関係について検討する。あらすじで示したように、コットには3人の姉と弟が1人、そしてすぐに第6子が生まれてくる状況にある。冒頭シーンでは、姉妹がコットを何度も呼ぶ声が響くだけで探しくるわけでもなく、コットは一人草むらから立ち上がり、トボトボと歩いて家に帰る。自分の部屋のおねしょをしたベッドの前に立ち、母親がくるとベッドの下に隠れ、母親は声だけかけて部屋を出ていく。ここでもふれられないコットが描かれている。ところが、ベッドの下に隠れて見えないコットとは対照的に、ベッドのおねしょはコットの存在を主張している。一方、コット自身も、外で洗濯物を干している母親が見えていても、目で追うだけで手伝うことはない。お互いにふれないようにしているとも言える。また、学校でも、隣の席の子のコップを取ってその子の水筒から勝手に牛乳を注ぐ。そこにクラスの子が走ってきてコップがひっくり返って牛乳がこぼれる。それでも、見ているクラスメートは駆け寄って来ることも、濡れた机や服を拭いてくれる子もない。つまり、コットは家庭だけではなく学校でも静かな（無口な）子どもなのである。逆の視点か

らみると、コット自身も誰かに助けを求めるわけでもないのである。また、父親の車に乗せられて帰宅する途中、バーに立ち寄って父親は酒を飲み、その間コットは1人壁際に座っている。話題としてもふれられることなくまるでそこにはいない存在として扱われている。このように、家族とコットの間には、ふれない関係があり、身体的にも抱えられることなく放り出されている。

このようなふれないことと関わる点について先にも取り上げた渡辺（2024）は、ケアの観点から2つの家族の物語として捉え、ネグレクトされていると断言しているコットの原家族と、対象喪失を経験している預け先の親戚夫婦の「愛し、慈しみ、大切に」するありようという差異について指摘し、コットの家族は親戚に助けを求める力があり、「コットと親戚夫婦との間にケアが循環」しているのだと指摘している。しかしながら、親戚夫婦との関わりでのコットの変化は結果的なことだとすると、むしろ、コットを家から放り出して現実的にもふれられないそこにはいない存在として扱った出来事だと捉えられる。というのも、両親がアイリンにコットを預かって欲しいと父親と母親のどちらが依頼するかについて揉めており、結果的にコットの母親が頼むことになったからである。とはいえ、母親はアイリンとは親戚付き合いがあったと想定されることからすると、子どもを迎え入れてくれるという期待を持っていた可能性も否定できない。それでも、コットの視点からすると、放りされて自分はいない存在、ふれられない存在として追いやられたと考えることもできる。コットを預けることになったのは、母親が出産するためであり、出産すると母親の腕は、生まれただけの子の弟によって占められることになり、さらに手一杯でコットのための空間はこれからも無いのである。

他方、親戚夫婦宅において、叔父は最後の場面を除くとコットに直接ふれることはない。夜の海辺に出かけた時に近づいてコートのボタンを留める程度で、はっきりとふれるのは、コットを家に送り届けてコットとの最後の別れ際に「じゃあな」と言って左手で軽く髪の毛を撫でた時だけである。このように一貫してふれることのないこと、身体的には抱えることなく過ごしていたとしても、親戚夫婦が心理的には抱え続けていたことが、ラストシーンで身体的にも抱えることによって象徴的に描かれているととらえられる。

2-2 ふれることと環境の失敗

ここでは、ふれることと、コットが夏の間過ごす親戚夫婦との間に生じる環境の失敗について検討する。では、どのようなふれることが表現されているのかまずみていく。父親の車で親戚夫婦の家に着くと、叔母のアイリンは、ドアを開けてしゃがみ込んでコットに接する。この

シーンでカメラはコットの足元から頭へとゆっくり動いて、アイリンがコットの全身（土で汚れている手足、服）を見ていることが映し出され、そして、コットの長い髪の毛をさっと後にかき分ける。家に入ると、まず風呂場でアイリンがコットを洗う。スポンジで手足を柔らかく洗い、ブラシで爪もきれいに洗う。このように出会いの最初から、ふれることの意味の1つにもある「④目・耳などに知覚する。」という点で目でふれて、さらに、アイリンの手は、優しくコットにふれていく。

次に、水を汲みに井戸へと出かける際に、アイリンとコットは手を「つなぐ」。つまり、ふれるよりもさらにしっかりとした接触である。一方で、すでに述べたように叔父のショーンとの身体接触はなく、牛舎の清掃の最中にいなくなったコットを探して見つけ出した時にも、ふれることなく大声で怒鳴りつける。これは叔父との間での最初の「環境の失敗」だと言え。「環境の失敗 (environmental failure)」(Winnicott, 1988) とは、「安全に抱えることの失敗であり、その時点で個人が持ち堪えうることを超えた失敗のことである。」と指摘している。怒鳴りつけられることでコットは、ショーンとの距離を置き素知らぬふりという受動的な態度で対応する。しばらくしてショーンは、ビスケットを媒介とした間接的な関わりを工夫する。このような慎重な関わりによって、今度は牛舎の清掃の際にそれぞれがブラシで床を磨くその音が、まるで二人が織りなすハーモニーのようにも聞こえるほど、身体的にはふれることはなくても、時間と空間をほどよい距離で共有する関わりが描かれる。このように二人の間にほどよい距離が作られた後に、ショーンはコットに家の門にある郵便受けまで走って行って郵便を取って戻ってくる、という遊びを提案してコットもこの提案にのる。つまり、Winnicott, (1971) が「遊ぶこと」を二人の遊びの重なり合いとして示したように、ショーンとコットの遊びが重なりあい始めたことを描いたシーンとして捉えることができる。

ところが、このように二人の遊びが重なり始めると、夫妻の間で夫妻の秘密が話題になり、その結果ショーンはまた強い口調でコットをなじむという抱える環境の失敗が反復される。さらに、アイリンの知り合いの女性から、夫妻には子どもがいて事故で亡くなったという夫妻の秘密を聞かされる。そのシーンは、二人のロングショットから始まり、まるで重い夫妻の秘密がコットにのしかかってくることを象徴するかのように二人に近づいたショットになり、その後に秘密が暴かれる。そしてコットは、迎えに来た親戚夫婦の車の中で、アイリンから着せられていたショール（おそらくは息子が着ていたもの）を脱ぐ。ショールを脱ぐのは、3回目の環境の失敗への反応だと言え、コットが1回目のショーンと

の間での失敗の時には、口をきかないという受動的な反応をしていたのが、今回はより明確に自ら脱ぐという主体的な動きへと変化している点が重要である。とはいえ、夫妻の秘密が急激に晒し出されて、コットにとって親戚夫婦への脱錯覚が生じた瞬間とも言え、映像的には単にショールを脱いでいるのであるが、見ている観客の視点からすると、まるで脱ぎ捨てたかのように感じられる。

秘密が明らかになった夜にショーンは、コットを連れて海辺へ出かける。海辺の木切れに横並びに座って遠くの漁火を二人がジョイント・アテンションする様子が描かれている。帰りにショーンはコットのコートのボタンを近づいて留めることはあっても、直接にふれることはない。つまり、ショーンの間では、距離を置いて何かを共有するような関わりが繰り返されており、コットの意に反するような侵襲的な関わりは身体レベルでは一切行われぬ。環境の失敗は心理的な側面だけで反復され、その度に、環境の失敗へのコットの対応は、より主体的なものへと変化している。

また、ショーンとコットの遊びの重なり合いとして論じたかけっこでは、次第に速く走れるようになりタイムは短くなる。つまり、ショーンの間では、コットを放っておいて自分だけで何かをするのではなく、時間や場を共有することをずっと繰り返しているのである。この繰り返しは、コットをまるでいないかのように1人でバーで酒を飲んだり、コットが後部座席にいるのに女性を助手席に乗せるような、コットをそこにいないものとして扱うような（つまりはふれない）父親のダンとの関係との対比が鮮明に描かれている。

しかしながら、コットと親戚夫婦との関係は、これまで述べてきたように少なくとも3度の失敗という反復を経ながら構築されていることは見落とせない点である。つまり、叔父と父親のコットへの関わり方の違いは、失敗をどのように取り扱うかであると言え。親戚夫婦は、失敗をただ反復したのではなく、時間と場を共有しながら抱えることが続けられており、その結果コット自身も環境の失敗への対応を変化させて、少しずつあらがうことができるようになったのだと考えられる。

また、コットの家はうす暗く、親戚夫婦宅は清潔で明るくても秘密もある。また、すでに述べてことだが、社会経済政治的環境の不安定さが、コットの家族には大きな影響を与えているようだが、親戚夫婦の暮らし現在は2人だけで、コットの家暮らしほどには不安定ではないように見える。コットの両親は5人の子どもを抱え、それでもアルコールやギャンブルにハマっている父親のありようは、荒んだ社会の反映ととらえることもできるであろう。それに、コットの家（ライティング）、ボロボロの壁など家自体が手入れされていない。むしろ、

この家族のありようや時代背景を映像として写し込んでいるのかもしれない。いずれにしても、この家の物理的空間のありようが、この家族自体が抱えられていないことを示しているのとらえることができる。それに、この家に尋ねてくる人も、出かけていく地域の人の関わりも描かれていない。

一方、親戚夫婦の家には地域の人が遊びにきたり、葬儀に出かけたり、牛のお産を手伝いに出かけるなど地域との交流のあることが描かれている。この点でも親戚夫婦の家は地域の人たちと場を共にしていると考えられ、この場の中にコットも招き入れられる。つまり、Winnicott (1971) が指摘しているような、2人の人、ここではコットとアイリンやショーンやその地域の人々との遊びの領域が重ね合わせられているのだと言える。この違いは何によるのかは本作の中には描かれていないが、コットの家族は地域の人たちとも場を共にすることの少ないことが、支えのない環境の中での子育ての一因とも考えられる。家族自体が地域からも抱えられていないことから、コットに十分にふれていく余裕がなく、コットが放っておかれることになっている面も考えられる。

改めて環境の失敗という観点から親戚夫婦とコットの関係を整理すると、3回とも親戚夫妻の秘密に関わる場面でのことである。最初は、牛舎の掃除をしているときに急にコットがいなくなった場面であり、おそらく息子が急にいなくなって死んでしまったことを思い出しのことと考えられ、また2度目は死んだ息子の服を着せるのではなくコットのために服を買いに出かける場面のことであり、さらに3度目は夫妻が直接関わったわけではないものの、第三者からコットが親戚夫婦の子どもが亡くなっているという秘密を突然聞かされた場面である。つまり、親戚夫妻がふれないように、コットにも言わないようにしていたことにふれることになる場面で生じているのである。つまり、1回の失敗への反応でコットが変化したのではなく、繰り返される失敗に晒されながら、それでもいねいな夫妻の関わりが積み重ねられていくことだということができる。

3. 心が動くこと：生き生きすること

ここまで述べてきたように、抱えられることによって、コットの他者との関わりに変化が生じ、生き生きとした主体として動き始める過程が作品には描かれていた。

ただ、実家に戻った生活の中で、どこまで生き生きした自分でコットがいられるのかは期待できるものではない。以前のように、必要のないところで出てくる父親、十分には止めることのできない母親という関係性は最後に向けても描かれている。ただ、最後の場面で、叔父に

抱き上げられて顔を埋めて「ダディ」とコットが2度目に言うのは、目の前に歩いてきている実の父親のことではなく、顔埋めて叔父に対してお父さんと呼んでいるように聞こえる。このように理解すると、「ダディ」と本当の意味で呼ぶことができる関係を叔父との間に構築することができたと考えられることは、少なくともコットの将来にとって貴重なことである。それでも家庭ではその余地は期待できない。さらに赤ん坊が生まれてきて、母親はより手一杯になり、放って置かれたり、父親からは無駄に干渉（いない存在としての扱いを）されたりする可能性は否定できないからである。

それでも、夏の一時期にこれまでには形成できなかった他者との深いつながり、いわば安定したアタッチメントスタイルが形成されたことは、楽観的に考えることはできないとしても、内在化されてさらに他の対人関係の中へと展開する可能性を秘めており、これまでと同じ家族環境へのコットの捉え方の変化は期待できる余地を残していると言える。それというのも、Abram (1996) が、「創造性、生き生きしていること、そしてリアルであると感じられる感覚は、健康な個人の指標であり、ウィニコットの仕事の中では指標となる概念である。」と指摘しており、ラストに向けてのコットのあり方は、元の家族の中に戻ってからも、生き生きと心が動き出していることの芽生えと考えられるからである。

4. コットへの観客としての「私」の転移としての「透明感」

「はじめに」で指摘したように、コットを演じるキャサリン・クリンチについて、本作の日本公式サイトには「透明感」という言葉で表現されている。また、渡辺 (2024) も、「圧倒的な存在感と透明感、そして愛らしさと言ったら！」と表現し、さらに「私は、冒頭から心をわしづかみにされ、まるで祖母のようにコットの幸せを祈らずにはいられない気持ちになりました。」とも述べている。このクリンチの演技への賛辞としての「透明感」を、本稿では筆者であり観客としての「私」のコットへの転移と仮定して検討してみることにする。「透明感」とは、広辞苑（第七版）によると、「色や材質が透明である感じ。また文学作品などに表現された、透き通って明るい感じ。」のことであり、「透明」とは、「透き通ること。くもりなく明らかなこと。」「物体が光などの電磁波を通すこと。」とある。つまり、透き通ってくもりがなく明るい感じの印象などを示している表現だと言える。「透明」とは、透けて見えることであり、そこに存在していないものとして捉えているということもできる。もちろん、透明感と表現することは、そこにコットが「いない」と言っているわけではなく存在の透明

感、つまりある意味での美しさ、清々しさのあることを表現していると言える。それでも、透明という言い方は、極端にいうならば、コットをそこにいない存在、“The Quiet Girl”として観客としての「私」がとらえているといえる。つまり、コットのことを「the wonder」と表現する父親のダンヤ、他の子どもの世話で手一杯でコットを放っておく（しかないとも言える）母親、それに姉たちも朝食をする時にも親戚の家に預けられる時にも戻ってきた時にも、自ら送り出したり出迎えたり声すらかけたりすることもなく、近寄っても来ない家族とコットとの関係を、観客も繰り返しているといえる。とはいえ、このような捉え方はすぐに受け入れられるものではないであろう。少なくとも意識的には、観客としての「私」はコットのことを放り出したり、いないものとしてとらえたりしているわけではない。コットはスクリーンにずっと映し出されており、観客としての「私」は目を離すことなくコットを見ているはずだからである。例えば、学校でコップがひっくり返って一人で何とかしようとしている姿も、バーで父親が酒を飲んでいる間も暗がりの中に一人じっと座っている姿も、父親が道を歩いている知り合いらしき女性を助手席に乗せる時に後部座席にじっと座っている姿も、牛舎の掃除を手伝おうと黙ってブラシを探しに行き、ショーンに怒鳴りつけられて逃げ出していく姿も、洋服を買ってもらいに町に出かけるときに八つ当たりのようにショーンに強い言葉を投げかけられている姿も、ショーンとアイリーンが息子を亡くしたという秘密とその息子の服を着せられていることを会ったばかりの人から突然聞かされ戸惑っている姿も、観客としての「私」は目をそらすことなくじっと見続けているであろう。ということからすると観客は、コットの存在感に惹きつけられ、この先どうなっていくのかと心配になりながら見守り続けていると言うほうがよいだろう。このようにみえてくると、「透明感」という表現は、コットをいないものとして扱っているという観客としての「私」の転移という仮定は適切ではないことになる。

しかしながら、コットが追いやられ、虐げられ、見るに耐えられない扱いを受けている弱い存在としての側面に目を奪われていく結果、最初には家族との間で、そして次は親戚不在との間でも、本稿で「環境の失敗」という表現で取り上げてきた大人たちの関わりによってどのような思いがコットの中に生まれているのかは、次第に見落とされている可能性もあると考えられる。この見落とし、見ていられないことがコットの「透明感」でもあるという筆者の仮定に含まれていると考えられる。なぜなら、関わることもなく放っておかれ、意図も尋ねられることなく怒鳴られたり八つ当たりに強い言葉を投げ

かけられるとしたら、少なくとも戸惑いやしょげるだけではない怒りや憤りの感情がよぎったり、後になって生じたとしても自然なことだと考えられるからである。ただ、コットにとって自分自身の感情を抑えることが当然のようになっている環境であることを考えると、怒って当然の場面での自分の怒りの感情を感じられない可能性はある。

そこで、親戚夫妻との間での3回目の環境の失敗後のコットの反応を思い返すと、それまで着せられていたショールを脱ぎ捨ててあらがったと筆者は映画を見て記憶していた。ところが、本稿を執筆しながら、筆者の記憶による記述と、映画の映像との間に齟齬がないかBlu-rayで見直すと、コットは着ていたショールを単に脱いでいるだけであった。そこで「かのように見えた」という表現を付けて残したのは、臨床心理学の臨床的な手法、つまり、筆者の主観を通してコットの心的世界を理解するための手法であり、関係の中でクライアントという個別の存在を理解しようとする臨床心理面接で通常用いている手法を活用した理解を示すためである。その結果、実際の映像との間にズレがあることが確認でき、「脱ぎ捨て」たというのは筆者のコットへの転移であることが明らかになったのである。あるいは、コットに脱ぎ捨ててほしいという筆者の願望を投影した表現ということもできるかもしれない。転移であっても投影であったとしても、透明とはいえないコットの心の中に積もり積もったままだと想像されるネガティブな感情、無意識的なところにくすぶっていると想像されるコットの想いと理解して、実際の映像とはずれているものの「脱ぎ捨ててあらがったかのように見える」という表現を用いることにした。

だとすると、単なる観客としての「私」の誤解、むしろ歪曲しているのではないかと、という批判もあるだろう。ここには、「映画を観る」とは何かということが関わっていると考えられる。映画を観るということは、単に物理的に同じ刺激として観客は映像を見ているのではなく、自分自身の内的な世界を通して映像を解釈しながら観ること、言い換えると映画と個人の間の相互作用の結果が映画を観るという体験になっていると筆者は考えている。単に個人の私的な体験の集積というだけでなく、臨床心理学的な理論や筆者の臨床的な立場である力動的アプローチの視点も組み込まれていることになる。このような観点からすると、渡辺（2024）の、「まるで祖母のように」という表現は、観客としてまるで祖母のような思いをコットとの間で体験したことの表現だと言える。つまり、孫と祖母との関係が観客としての著者に転移された見方ということもできるであろう。このような映画と観客の関係について前田（1985）は、「映画とは眠ら

ないで見て夢であるともいえます。」と述べたうえで、映画館の「暗闇で映像に集中しているうちに」退行し、「本能衝動の活性化がおこり」、「スクリーンが観客の代償行動——身代わり参加の舞台」となっていると指摘している。このような指摘からも、観客自身の心のありようと映像（もちろん音声や音楽等も含めて）とが観客の心の中で混ぜ合わせられながら生じることが、映画を観るという体験であると考えられる。このように考えて、筆者の主観的な捉え方を、映像的な事実とは異なるものであっても、臨床心理学的な映画の検討の記述としては意味あるものだと考えて残すことにしたのである。

おわりに

ここでは、改めて「無口な（もの静かな）女の子」としてのコットについて取り上げておきたい。すでに述べてきたように、コットは、抱えられずに放って置かれた子どもであったことが作品の前半では強調されている。もちろん、赤ん坊の頃からの発達を考えると、まったく放り出してしまったり、抱えられずに生きていくことはできない。実際、新たに生まれた赤ん坊をコットの母親は抱き抱えて授乳もしている。もちろん、きょうだいによる育児の仕方の差異がないとはいえないが、初期には何らかのふれることが家族との関係でもあったと推測される。しかしながら、コットが8歳という段階での描き方には、家族の中で放っておかれること、ふれられないことが際立って描かれている。たとえば、コットは家族から名前では呼ばれることはあっても直接にはふれられない存在である。このことを1つの象徴と考えるなら、コットの家族にも何らかのふれることのできない秘密が存在しているのかもしれない。1つには、Ruf (2024) が指摘しているようにコットは「望まれない子」であり、そのことが、そこに存在しないかのように放って置かれたり放り出されたりしてふれられない存在であることは、1つの反復として捉えることができる。そのため、コットと関わると誰しも放り出したくなるような転移関係が生じやすい可能性もある。避妊することが夫婦間でも禁止された時代であり、夫婦にとっては望まれない妊娠であり望まれない子どもとなった可能性も考えられる。

一方で、コット自身も、姉たちやすぐ下の弟や生まれたばかりの弟を抱き抱える場面も描かれていない。けれど、アイリンと外出した時には、乳母車に乗っている赤ん坊をじっと見つめるシーンが描かれている。このシーンからすると、叔母といる安心感から赤ん坊への関心が生じたと言える。そして自宅に帰ると、生まれたばかりの弟が泣き出して母親が抱いて部屋に戻ってくると、コットはじっと二人がいる方向を見ており、小さいながらも変化の一つということができる。

ところで、Ruf (2024) は、アイリン夫妻の抱えている秘密や「農場の多くの影との遭遇によって力を得ます。彼女は井戸に——文字通り——落ち、そして這い上がります。」と農場や井戸などが表現している「深淵」(abysses) さや、様々な「影」との関わり (encounter with the many shadows of the farm) の中で変化が生じた点についても指摘している。その上で、ショーンがコットに教えたかけっこについて、「それは、彼女が自力で動き、そして戻ってくる能力を楽しむことです。」と述べ、これがコットの「強さの最高の兆候」であると指摘している。アイリン夫妻の家に来るまでは、家族から受動的に放り出されるままになるしかなく、そこにはいない、ふれられない存在として生きていたのだと言える。そこから、かけっこで自ら離れてまた自ら戻ってくるというかけっこの練習を通して、井戸に落ちても吸い込まれることなく這い上がる力も身につけたとRuf (2024) の指摘をとらえることができる。つまり、コットは、自分自身で出ていき、そして自分自身で戻ってくる、這い上がってくるという生き生きと心が動きだした主体としての発達を遂げたと言える。このような受動から能動への転換についてFreud (1920) は、1歳半の子どもの遊びを観察して検討している。小さなおもちゃをイスの下などあちこちに投げ散らかしていたのだが、その後、糸巻きから伸びた板を掴んでイスの下に「オーオーオー」(Fort:行った)と言って放り込み、「ダー」(Da:出てきた)と言って巻き戻すという遊びを、養育者に置いていかれた子どもの怒りと放り出された自分自身を、おもちゃや糸巻きを放り投げることで示し、さらに、糸巻きをたぐって引き戻すことで連れ戻し、その場の状況の主体として存在することを指摘していることと重なり合う。対象喪失と対象の再発見、消えずにそこに待っていてくれる、という対象の情緒的な恒常性について実感することが、かけっこの臨床心理学的な意味であったとも言える。

さいごに、十分に検討できなかった、コットを引き立てているショットについてもふれることにする。冒頭シーンでは草むらの向こうに林のある光景が映し出されコットの姿はない。ところがカメラが画角を下げると次第にコットの、というより折れ曲がった脚が写っていることに気づく。このように、最初からコットの姿は隠されているとも言える。ところが、その後のショットを見ていくと、正面からのアップよりも横顔のアップ、ミドルショットが多用されている。アイリン夫妻の家の食卓に、コットが座っているシーンなどでも、コットの奥に立っているショーンにはピントはあっておらず少しぼかされており、その手前にいるアイリンにもピントは合っていない。この2人の間にあるコットの横顔にピントが

合っていて、光の中に浮かび上がっている。しかもそのコットの横顔は、かなりの頻度でうなだれ、うつむいている。このようなコットの横顔に焦点が当てられてうつむいた映像と、ラストにしっかりと正面を見すえ、長い髪を振り乱して疾走する映像は、それまでの静かなコットと自分の力で動き出しているコットとを対比的に映し出しており、観客としても印象づけられていると考えられる。ということは、映画の中では、主役としてスポットが当てられ、ピントも合っており、映像的な点からすると、そこにいること、存在していることがむしろ強調されていることになる。それでも、家族との関わりの中では放っておかれる存在として描かれていることは、逆説的だと言える。主役として目立つように写し出されながら隠され、ふれられない存在として位置づけられている。

また、コットが車から降りるときにドアを誰が開けるのかをみると、はじめてコットを迎え入れるシーンでも、コットの服を買うために町に出かける時にも、ドアを開けるのはアイリーンである。そして最後にコットを自宅へ送り届けるために車に乗せる時にも自宅に着いて降りる時にもショーンがコットのためにドアを開ける。つまり、そこにいる存在としてコットに夫妻はふれていることが示されている。それでもこの最後の送迎シーンはロングショットで撮影されており、強い絆ができたとしても帰宅後のコットのことは、環境（両親）に委ねるしかないという心許なさを示しているとも言える。

本稿では、部分的には映像的な観点から論じたものの、物語を追った分析が中心であった。映画を臨床心理学的に分析する論文としては、今後さらに映像的な観点からも検討することが課題である。

文献

- Abram, J. (1996). *The Language of Winnicott: A dictionary of Winnicott's Use of Words*. 館直彦 (監訳) (2006). ウィニコット用語辞典. 誠信書房, p.11.
- 北野充 (2022). アイルランド現代史：独立と紛争、そしてリベラルな富裕国へ. 中公新書.
- Freud, S. (1920). *Beyond the Pleasure Principle*. In Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud. Volume XVIII, The Hogarth press, pp.12-17.
- Harlow, H. F. and Mears, C. (1979). *THE HUMAN MODEL: Primate Perspectives*. Washington, D. C.: V.H. Winston & Sons. a Division of Scripta Technica, 梶田正巳・酒井亮爾・中野靖彦 (訳) (1985). ヒューマン・モデル. 黎明書房.
- 前田重治 (1985). 夢・空想・倒錯 - 退行の精神分析 - .

彩古書房. p.244.

- Ruf, Frederick (2024). "The Quiet Girl". *Journal of Religion & Film*: Vol. 27: Iss. 2, Article 27.
<https://digitalcommons.unomaha.edu/jrf/vol27/iss2/27>
- Ryan, M. & Lenos, M. (2012). *ANINTRODUCTION TO FILM ANALYSIS: Technique and Meaning in Narrative Film*. New York: The Continuum International Publishing Group. 田畑暁生 (訳) (2014). *Film Analysis 映画分析入門*. フィルムアート社.
- 笹田裕子 (2015). Joan G. RobinsonのWhen Marnie Was Thereにおける出遭いと少女の成長. 清泉女子大学人文科学研究所紀要, 36, 204-214.
- Shelton, M. (2023). *How "The Quiet Girl" Can Educate Patients and Clinicians: For many reasons, the acclaimed film is ideal for therapy and education*. Lancaster, V. (Ed.), *Sex Life of the American Male*. <https://www.psychologytoday.com/us/blog/sex-life-of-the-american-male/202303/using-film-to-educate-patients-and-aspiring-clinicians> (2025年6月25日最終閲覧).
- 白井佳夫 (2024). アイルランドの目立たない女の子にのしかかる「平凡で日常的な差別」とは? : アイルランド映画「コット、はじまりの夏」. 部落解放, 848, 68-69.
- 渡辺裕子 (2024) : 【連載】映画と、生きるということ (10), 優しさとケアが循環する居場所『コット、はじまりの夏』. 看護, 76(12), 62-63.
- Winnicott, D. W. (1971). *Playing and Reality*. Associated Books Publishers. 橋本雅夫 (訳) 遊ぶことと現実. 誠信書房.
- Winnicott, D. W. (1988) : *Human Nature*, London: Free Association Books. 館直彦 (訳) 牛島定信 (監訳) (2004) : 人間の本性: ウィニコットの講義録. 誠信書房.
- ## 映画関連資料
- 『コット、はじまりの夏』パンフレット: 編集・発行: 松竹株式会社事業推進部, 発行承認: 株式会社フラッグ, 2024年1月26日発行.
- 『コット、はじまりの夏』の日本公式サイト: 配給・宣伝: フラッグ.
<https://www.flag-pictures.co.jp/caitmovie/> (2025年9月22日最終閲覧).
- 『コット、はじまりの夏』Blue-ray (2022/2024), 発売元: フラッグ, 販売元: オデッサ・エンタテインメント. 映画.COMウェブサイト, 「コット、はじまりの夏」.
<https://eiga.com/movie/100690/> (2025年9月22日最終閲覧).